

カントボーイで、男が恋愛対象の俺は現実世界で相手を見つけるのは難しい。けれど恋人も欲しい。マッチングアプリを始めたのは、そんな俺を見た友人に背中を押されたからだった。

正直、やりたくなかった。写真だけで人を判断するのも、初対面でご飯を食べるのも、なにか底が抜けたみたいで落ち着かない。でも渋々登録してみたら、返信が来るのを待つようになった相手が、一人だけいた。

亜朗、という人だった。

プロフィールの写真は、妙にぼかしてあった。最初は「顔に自信がないのかな」と思った。でもメッセージを読んでみると、テンポが合った。こちらの返信をちゃんと受け取ってくれる感じがして、返ってくる言葉が面白かった。いつの間にか、毎日やり取りするのが普通になっていた。

（なんか、話しやすい。変なやつじゃないのかも…  
…）

ほかした写真から「それなりに整った顔なんだろうな」くらいに想像していた。

実物は、想像より静かだった。派手さはなくて、でもじっと見ると目が離せない顔をしていた。彫りが深いというより、パーツひとつひとつがすっきりと整っている。鼻筋が通っていて、目元が涼しくて、笑っていないのに怖い感じはしない。むしろ、じっと見られると落ち着かなくなる種類の顔だった。髪は少し長めで、自然に流してある。

(……やばい。めちゃくちゃ顔いい)

声が低くて落ち着いていて、話しかけてきたときに少しだけ驚いた。写真であれだけほかしていたのに、と思った。こんな顔、隠す意味があったのか。

「もう来てたんだ」

「……まあ」

「迷った？」

「迷ってない。ちょっと電車が遅れた」

「そっか」

「近くのカフェでいい？」

「うん」

それだけ言って、亜朗は歩き出した。こっちの返事を待っているようで、でも返事の内容はあまり気にしていないみたいだった。

カフェでコーヒーを飲みながら、二時間くらい話した。

楽しかった。普通に、本当に楽しかった。何がそんなによかったのか、うまく説明できないけれど、気づいたら全然変な間がなかった。

(思ったより全然いいな……)

そう思っていたら、亜朗が「近くに住んでるんだけど、お茶でも飲む？」と言った。

「……うち？」

「うん。すぐそこだし、お茶だけ」

一瞬、断ろうと思った。でも「すぐそこ」「お茶だけ」という言葉に、大げさに断るのも変かな、という気持ちになった。

悪意がある感じはしなかった。怖い感じもしなかった。それに、カントボーイとはいえ同性同士だ。だからあまり警戒していなかった。

「……じゃあ、少しだけ」

「うん」

(少しだけ。お茶だけ。すぐ帰ればいい……)

そう思ってタクシーに乗って、大きなマンションに着いた。エレベーターで上がって、廊下の奥の部屋に入る。

あまり物のない、整った部屋だった。本棚には本が並んでいて、テーブルの上には何もなく、生活感というより、誰かが丁寧に選んだような静けさがあった。

「座ってて。緑茶でいい？」

「……ああ、うん」

亜朗がソファを示す。別に圧はない。ただ、言われたままそこに座った。

「本、多いな。よく読むの？」

「読む方じゃないけど、なんとなく置いてる」

「じゃあ読まないのかよ」

「読むのもあるよ。これとか面白いし」

他愛のない話をした。大学のこと、好きな映画のこと、最近のこと。カフェで話していたのと何も変わらなかった。むしろ静かな分、話しやすかった。

(……本当にお茶飲むだけだったな……)

気づいたら、カップが空になっていた。でもそれにも気づかないくらい、話していた。

(楽しいな、また……)

そう思った瞬間、ふっと会話が途切れた。

亜朗がこっちを見ていた。さっきまでと、少し違う目だった。

(……あれ)

なんとなく、目が外せなかった。

気づいたとき、亜朗の顔が近くなっていた。

ソファの背に追いやられるようにして座っていたのに、いつの間にか距離が詰まっていて、肩が触れるくらいの近さになっていた。

「……ちょっと。近いって」

「ああ、うん……」

立ち上がろうとしたら、腕を掴まれた。引っ張られるわけじゃない。強く掴まれているわけじゃない。ただ、そこに置かれているだけみたいな手だった。でも絶対に離れない手だった。

「……そろそろ、帰ろうと思うよ」

「うん」

返事はある。でも腕は離れない。「うん」が、帰っていいという意味じゃないのが、なぜかわかった。

亜朗が、静かに息を吐いた。それから少しだけ身体を傾けた。

「カントボーイ、なんだよね」

その手がパーカーの裾にするりと触れた。動作があまりにも自然で、「やめろ」のタイミングを逃した。

「んっ……！ ちょ、ちょっと待って」

「いいじゃん」

（いいじゃん、じゃない。待って、ほんとに……っ）

パーカーの下に手が差し込まれる。素肌に触れる指先が温かくて、ゾクゾクとした。